



## 神に向かつて歩む者（一）

岩 島 公

昭和四十八年十二月二十三日、水戸無教会クリスマス集会で語ったもの。

「すなわち、わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。∞わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものである。∞なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるために、死んで生き返られたからである。Ⅰ〇それなのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。Ⅱすなわち

「主が言われる。わたしは生きている。すべてのひびは、わたしに対してかがみ、すべての舌は、神にさんびをささげるであろう」

と書いてある。ⅠⅡだから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。（ロマ十四・七―十二）

わたくしが今日語ろうとするすべての思いは、この中にこもっております。この理解の上に立つて、七―九については、「キリストにある歓喜」を、十―十二については、「キリストにある独立」を、二つを貫く主題を「神に向かつて歩む者」として語らせていただきます。

第一の、「キリストにある歓喜」ということが、わたくしの意識の問題になった経過を申し上げます。

十二月九日第二日曜の午後、東村山の教友村岡豊兄のお宅で行われた「からし種の会」のクリスマス集会に招かれまして、その時、七十幾歳かのある婦人が、「結婚一年九か月で夫をなくした。その時、キリストに捕えられた。そして、『神のために生きるのだ』という自覚がおきた。そうしたら、もう嬉しくてたまらなくなつた。」という趣旨の感話をされました。淡々と語られるそのことばに、その信仰の喜びは、数十年を経て現在につづく揺がぬものであることがわかりまして、畏敬の念を禁ずることができませんでした。

「神のために生きるのだという自覚から、嬉しくてたまらなくなつた。」ということばは、わたくしに気づいていなかったものに気づかせてくれました。

それは、わたくしも、「生きているのは、もはや自分のためではない、神のため、キリストのため以外に何もない。そういうも

のになっている。」という事実、改めて気づいたのであります。

そうすると、このわたくしに、何ができようと思えなかつたかと、聖書の学問的知識がどんなに足りなかつたかと、わたくしの人格の中心である魂が、本当にキリストのために生きる者とせられていゝといふことは、何といふありがたいことであらうかと驚き、再びかれることはないであらうと思はれる喜びが、静かに湧き出したのであります。

さて、このような事実を、聖書はどのように記しているかを求めました。そして、気づいたところが、ロマ十四・七―九であります。

ロマ書十二章から十五章十三までは、信仰の実践についてのべてあり、十四章は、「互にさばくな」といふ問題を扱つていゝところですが、「キリストにある歡喜」を保証する根拠としては、前後のすじと一応切りはなして七―九を考え、「キリストにある獨立」を保証する根拠として十一―十二を扱う場合は、前後のすじと関連して考えることにいたします。

も一度読んで、簡単にわたくしの受取り方を申し上げます。

「すなわち、わたくしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。

∞わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたくしたちは主のものなのである。

この七、八節は、キリストを信するわたしたちは、みんな、キリストのために生きまた死ぬものになつていゝといふ、事実の提示であります。

なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるために、死んで生き返られたからである。

九節は、七、八節の事実が、いかなる理由によつて起きたかの理由を、「なぜなら……からである」とのべていゝのであります。

「死者と生者との主となる」とは、死者と生者との支配者となるといふことで、「死者を支配する」とは、キリストを信じて死んだ者を復活させて下さること、「生者を支配する」とは、聖霊を与えて十字架による罪の赦しを信するものとし、キリストのために生きるものに作り変えて下さることであります。

「死んで生き返られた」とは、ご承知の通り、人類の罪の赦しを得させるために、十字架について死に、その使命を果して、神によつて復活させられたことでもあります。

まことに、キリストを信する者が、キリストのため、神のために生きる者となるといふことは、その人の力によるのではなく、

キリストの霊が信する者に宿って、そのような者として下さるのであります。

キリストを信する者を、神のために生きるものとして生れ変らせるキリストの十字架と復活は、なぜ行われたか。ごぞんじのようにヨハネの第一の手紙にこう書かれています。

「神はそのひとり子を世につかわし、彼によつてわたしたちを生かすようにして下さった。それによつて、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。『わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。』

(ヨハネⅠ四・九、十)

この中から、三つの重要な意味を取りあげます。

第一は、キリストは、神がおつかわしになった、神の御ひとり子である。

第二は、神が御ひとり子をこの世につかわされたので、わたしたちは亡びから救われて、永遠に生きるものとなった。

第三は、神は、わたしたちの罪を赦して亡びから救い、永遠に

生きるものとするために、わたしたちの罪のあがないの供物として、御ひとり子キリストを、十字架に死なせられた。ということであります。

キリスト教が十字架教であるという時、イエス・キリストだけに十字架があるのではない。御ひとり子を人の子として世に降したもうそのことに、神に痛みがあり、ことに、その御ひとり子を十字架に死なせ給うたということは、ご自身が十字架におつきになったのと同じであります。だから、ヨハネは「ここに愛がある」と言うのであります。

神のみ旨によつて、神の子が人の子として世に降り、生涯の終りを決するゲッセマネの祈りにおいて、三度祈り、お答えなき神の沈黙の中にみ旨を悟り、人類の罪を負うてだまつて十字架におつきになったということは、何という崇高・沈痛な事実でありましょう。

彼はわれわれのたがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によつて、われわれはいやされたのだ。

(イザヤ五三・五)

われらに永遠のいのちを賜い、神とキリストのために生きるものとして下さった十字架と復活は、神のみ旨と、み旨に全く従われたイエス・キリストによって成就されたのであります。

イザヤ書五二・十三―五三・十二のエホバの僕の第四歌は、第二イザヤの弟子が、第二イザヤの生涯を目撃し、その苦難の意義を記したものであり、それがキリストの十字架の預言となったのだといわれておりますが、このように、「打たれた傷によって、われわれはいやされた。」と書いた筆者は、師の打ち傷の痛みを、自らの痛みとして感じとっている証拠であります。キリストが、十字架の上に、罪のさばきを受けたもうた痛みを感じることなくして、われらはいやされることはありません。罪を離れて、真に主のものとなることはできません。

誰がまことにキリストの痛みを感じ、主のものとなるのでありましょうか。

ここで話の始めにかえつて、「神のために生きるのだという自覚から、嬉しくてたまらなくなった。」といわれた婦人は、どのような体験の中でその自覚を得られたかを考えてみましょう。それは、結婚一年九か月で夫をなくし、その時キリストに捕えられ、そして「神のために生きるのだ」という自覚が起きたといわれるのです。

神のため、キリストのために、文字通りのいのちをかけて生きている方、または生きられた方々は、最愛の夫を、妻を、あるいは子を取られた悲痛のどん底で、そういう痛みの中で、神の愛を知り、世に死して神のために生きる歓喜の人となられた例が多いのであります。そうでない人は、別のいろいろの苦難の中で、世につく宝をだんだん失つて、この世に未練はいささかもなく、ただ神の国を望んで生きるようにせられた人々であります。

神の愛は、それほど厳しく、神以外の何ものをも愛することを許さないであります。けれども、世につくものがなくなればなくなるほど、歓喜にあふれるものとなるということは、まことに不思議な事実であります。パウロも、「キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものをふん土のように思っている。」(ピリピ三・八)といっております。

沖縄の愛楽園へ訪問した二度目の夜、十数人と懇談しましたが、その時、ある姉妹はこう言いました。

「わたくしがここに入つたのは思春期の頃でした。ライと言われることは死ぬほどこいやで、ライじゃない、ライじゃないと言つて手を振つて先生を困らせました。それから三十年……。わたしの生涯はライのためすべてを奪われました。けれども、イエスの愛を知ることによつて、すべてをつぐない得て余りがあります。」

わたしは涙の流れるのをとめることができませんでした。

まことに、イエスの愛は、信ずるすべての人を豊かに慰め、歓喜の人といたします。そして、わがためには生きず、神のために生きるものに作り変えるのであります。

本日ここにお集りの方々も、それぞれの道において召されてキリストのものとなり、み名のために生きて、その人ならではの輝きを発していらつしやることを信じます。またいくつかの事実を知っておりますが、一々申し上げません。

わたくしどもイエス・キリストを信ずる者は、恩恵により、その信仰によって、天国をさして休みなく進んでいるエスカレーターに、みんな乗っているであります。自分の力ではない。イエスさまの见えない力に引かれて、刻々に天国に運ばれているのであります。何という歓喜、感謝でありましょう。以上で「キリストにある歓喜」という、話の第一部を終わります。

## テサロニケ人への

### 第一の手紙の勉強

宇野 輝

(これは水戸無教会グループの夏期横川集会の共同研究に参加するに当って、私自身が第一の手紙を理解するために勉強した下調べのテキストである。尚、当日持参したテキストに少しくペンを加え、更に手紙の勉強の前提ともなるパウロが福音を伝えたヘレ

ニズム・ローマ世界のユダヤ教について書き加えた。浅学、未熟、御教示を得ば幸、私は恥を掻きかき学びつつ、福音を伝えたいと思う。)

#### 一 恩恵の一里塚

七三年八月十八、十九日、私達、イエス様にありて親しい水無グループの兄弟姉妹十七人は、めいめいの持場における一年の馳せ場の後に、再びここ、久滋郡横川の里の溪流の畔で、せゝらぎの音をきゝつゝ、共に祈り、讃美し、聖書を学びあうときをあたえられた。私にとつても省りみて十一回、その一回一回は、まさに恩恵の一里塚であつた。滴る杉木立の緑と、飛瀑の白さに私達の心はうるほされた。それは私達にとつて、「いいいの水際」であるとともに、又新しい出発への基点なのである。かつてこの地に共につどい、今は遠くそれぞれの持場で信仰を守っている兄弟姉妹が思われた。珠に戦に傷ついて病床にあるM・I兄、二人の兄弟が思われた。又長い苦悩の十字架を負わされているF妹とその御両親、前進のために厳しい戦の場にあるO兄とL子さん、又その愛する者が思われた。神様の御守りにより、再び讃美を共にする日の速かならんことを祈るのである。

#### 二 やり直しの勉強

第二日目の第一講である四章を担当された小貫兄が言われた。

「自分の勉強にもなるから四章だけならとお引受けして、さて四章の準備をはじめると、結局四章丈ではすまなくて、全体を勉強し直してからでないとはじまらないことが解つた。それで、ゆうべは遅くまでかかつて、やつと、どうにかこぎつけたような訳でして、充分とは言えないけれども……」と。はにかみの笑を含み

つつ淡々と話される小柄な小貫兄である。晴嵐荘大学の経歴をもたれる兄が、デバートの経営という超多忙の激務の中に生きつつ、夏の夜の白らむ迄準備をされて参加される姿。こんなところに私達無教会の素人エクレジヤのよさがあると思う。聖書は何よりも、生命のみことばの書であるから。私達水戸グループの特質は、誰が何章を担当しても、決して先生ではない。みんなみ言葉を慕って集る、ひとしく、親しい兄弟姉妹なのである。誰もみんな独立で、自由なのである。ただ、み言葉を愛に生きようとすることだけが、みんなの帯となる。

実は私のこの勉強も、小貫兄とほぼ同じ経過をたどったのである。はじめに、第一の手紙を二、三度読んで、すぐ参考書と首っ引で、五章にかかった。ペンが全々動かない。砂を噛む味気なさで、一日たち、二日たち、そのうち「そんな安易な構えで、み言葉を語ろうなんぞと。落第!。」そんな声にハネ返されて、又全体のやり直しから、準備のテキストとして生れたのである。

三 パウロが福音を伝えた当時のヘレニズム・ローマ世界のユダヤ教

パウロがローマ帝国内のヘレニズム文化（アレキサンダー大王の東征後、後期ギリシャ文化と東方アジア文化が、ローマ帝国の統治下に融合した地中海を中心とする汎世界文化）の都市から都市へ福音を伝えた紀元四十年―五十年代当時のユダヤ民族は、それ迄の長い迫害の歴史により、帝国内のいたるところの都市に離散して住んでいた。（デアスポラと言う。）その数は多分彼等の故国バレスチナの四乃至五倍の人口ではなかったかと思われる。

（正確には解らないが、四、五百万であろう。）

彼等はその都市に住んで盛な経済的活動を行った。それは丁度今日、横浜や、神戸や、長崎の南京町の中国人華僑のように、彼等は互に助けあった。彼等海外在住のユダヤ人の大部分は母国語である、ヘブライ語（当時はイエス様も話されたアラム語）を忘れてしまっていたが、当時のヘレニズム・ローマ世界の共通語である後期通俗ギリシャ語（コイネーという）でお互の意志が通じた。彼等の民族意識を、いろいろな圧迫にもかかわらず、その住んでいる地域民族への同化から守ったものは、彼等の信ずるユダヤ教の信仰であった。ことに世界の宗教の発祥地域と言われる小アジアや、ギリシャのさまざまな偶像教の中にあつて、又その文化に対して、同化されることを拒んでエホバの神に対する信仰と、モーセの律法に対する頑強なまでに保守的な民族的慣習を守った。割礼はその最もいちじるしい特徴でエホバの選民たることを誇とする慣習であつた。彼等は割礼をもってエホバに対する従順のシンボルとした。

註、勿論「カプセル入りの純ユダヤ教などというものはバレスチナに於てすらも」みられなかったのであつて、世界を洗うヘレニズムの潮流の中に活発に生き抜いたヘレニストのユダヤ教徒達が、やがて興ったキリスト教の発展にも大きな橋渡しの役割を果たしたのである。使徒行伝七章に示された、ユダヤ民族の歴史に対して、より広い視野から恩恵と審判の厳しい批判の歴史解釈を下して、神殿宗教の廃棄を指摘したステパノも、その精神を拡大継承したタルソのパウロも共にヘレニストであつた。ガリラヤとユダヤの大地を歩まれた歴史のイエスが、パウロの福音の戦と思案の中でコロサイ書、エペソ書、或はヨハネの福音に反映する主

(キュリオス)にまで啓示される過程で、ヘレニズム(ことにその神秘主義思想)は助成の役割を果たしたと思う。律法に対して、厳しい自由な批判精神を持たれたイエス様と東西世界の交通の要衝であったガラリヤの位置(それに対するユダヤ)も無関係ではなかったと学者は言う。

## 土の器の信仰

|||塚本虎二先生から学んだこと|||

桜井五郎

我等この宝を土の器に有てり。これ優れて大なる能力の我等より出でずして神より出づることの顕れんためなり。(コリント後書第四章七節)

塚本先生の丸の内集会に出席を許された、かつての二年間を思うとき、第一に私の心に浮ぶのは、このパウロの手紙の一節(あえて文語訳により引用)であります。当時、まだ聖書を学び始めて間もない頃の私にとって、「土の器」という平凡なことばが、聖書の中で何と新鮮なひびきをもって迫ったことでしょう。さらに、「この宝」ということばとあわせて、深い奥義を示すものであることを学び、いつまでも忘れることのできない一節となつていたのであります。

人間は神様から見れば、いかにこわれやすい、もろい土の器にすぎないものであるかは、創世記の記事でも明らかところで、人はちりにかえる存在にほかなりません。

しかし、そのような人間にも、イエス・キリストの福音という、「宝」が宿るときに、そこに神様の偉大な力があらわれるとパウロは申します。そうした土の器としての人間に、福音が宿る理由は、すぐれて偉大な能力が、決して人間から出たものでなく、神様から出たものであることがあらわれる為です。

いいかえれば、人の計画、人のねがいがかえられることなく、神の計画、神の意思の成ることが第一だということです。従つて、あくまでも神中心の思想、信仰であり、そこにパウロの説く福音の本質が示されています。

人間は何か自分の力でなすことができると思うところに人間の思い上りというか、人間の罪があります。結局のところ、被造物としての人間は、神様によらなければ何ひとつなしとげることのできない、はかない存在であります。本当の力は神様からいただくものでなければなりません。

最近のような、わが国をはじめ世界的な、石油危機をきっかけとした経済的社会的混乱も、もとをただせば、神を忘れ、神を恐れぬ人間の思い上りが原因であります。



塚本先生は生涯をかけた聖書改訳という大事業についても、よく、「改訳が完成するか、しないかは意に介しない」とか、あるいはまた、長年の丸の内集会の存続についても、「それが続くことが、続くまいが、どうでもよいことだ」など申されました。さらには、「人間である先生を見てはいけない、先生ではなく、イエス・キリストを見よ」といった意味のことも、たびたび申されました。これらのお言葉には、先生が土の器として、自分の力による成果ではなく、福音の力による成果の上ることのみをねがわれた先生の信仰が示されていると申せましょう。

それでは、われわれは、土の器であるからといって、自分を卑下したり、自分を粗末にし、あるいは絶望的になったりすることが許されるでしょうか。もちろん、否であります。その様な考えになることもまた人の罪であると思います。神様からつくられた存在としての私たちは、神様のご用がすむまでは、身心ともに健全に保たねばなりません。この世の望みが絶えそうなきも、じつと堪えしのぶというのが信仰者のあり方ではないでしょうか。先生はまたよく、「その日暮し」ということも申されましたが、これは決して、捨てばちの絶望的な生き方を意味するものではありません。神の被造物として、すべてを父なる神様にまかせ切って生きる者には、明日という日について何ら思い煩うことなく、毎日毎日をせい一杯に生きれば良いのだとの意味でありましょう。神様はそのご用のために、私たちをどんな役割につけ給

うのか、また、どんな環境の中を歩ませようとされるのか、もちろん知る由もありません。この世と相容れない福音の真理が、弱い私たちを敢えて苦難の道へと歩ませることもあるでしょう。しかし、どんな恥多い、苦境に立たされても、私たちにはつぎのような慰めと希望に満ちたイエス様の言葉がある限り平安であります。

「ああ幸いだ、踏みつけられてじつと我慢している人たち。」  
「約束の地なる御国を相続する」のはその人たちだから」と。

(塚本訳、マタイ福音書五章五節)

福音の使徒として、生涯を聖書研究と福音伝道に捧げられた塚本先生は天に召されましたが、素人にもわかるようにと、文字どおり心血を注いで訳された聖書私訳が、貴重な遺産となりました。内村鑑三先生いらいの無教会主義による福音の真理が、なお、塚本先生の私訳をおし、親しみやすい結晶として私たちにのこされたのであります。

私たちは、このキリストの福音をうけ入れ、平信徒として宣傳伝えることによって、無教会主義の伝統を守るべきであります。塚本先生の告別式当日、私は霊前に菊花をささげながら、先生の遺影を仰いで、なぜか、キリストに従うことの、さびしくも、きびしい道となるであろうことを思わされました。

十字架の道であるからでありましょうか。いまはその意味がわかりませんが、私はこれから、聖書を頼りに、ただイエス様だけを仰ぐ歩みを続け度く祈るものであります。

思えば、丸の内いらいもう二十年近くも経ってしまいました。

ここに先生から学んだことの一端を申しのべ、感謝の思い出いたします次第です。

## NTD 『ヨハネの黙示録』

菊池 信生

これまで、わたしは聖書の註解書をあまり読んだことがなかった。自分から進んで読もうとする気がなかった。ある先生から、ドイツの新約聖書註解NTDが翻訳出版され、非常に良い本だからぜひかって読むように薦められたが、不安であつた。買つても、ところどころ拾い読みする程度で終つてしまうのではないかと思つたからでした。そんな訳で、NTD購読の予約はしたものの、きわめて消極的な気持からでした。今年の一月半ばに、一冊目の「ヨハネの黙示録」が手元に届いた。まず、付録に目を通した。本の用紙不足や発送用の函の段ボール不足のためにNTD刊行会は、出版が非常に困難になり、予定の刊行日より遅れて本を発送することになった。

刊行会の熱心な態度を思い、わたしは自分の高慢さに恥づかしかつた。それから、註解書を読み始めました。聖書の日本語訳

は、生々として力強く、また活字も読みやすい組型になっており、聖書の言葉が生きて本から飛び出してくる。そんな感じがしました。註解は簡潔明瞭で、読んでいくにつれて、わたしは大きな強い力に捕えられているようでした。この力は、ヨハネの内に宿っている御霊の働きによるのでしょうか、それを正しく分りやすく説明してくれる註解者と翻訳して下さった人の働きにもあります。黙示録を機械的に読んだことはありましたが、黙示の意味をよく理解できませんでした。黙示録にたびたび出て来る「幻」や「夢」という言葉に、わたしはこれまで本能的に強い拒絶反応をしていました。また、この事を内心誇りにすら思っていました。昔の有名な神学者のなかに、黙示録を高く評価しなかった人がいたというのですが、その気持もわかるような気がします。

ヨハネは、神からの御使の使信によつて、過去のこと（見たこと）、現在のこと、未来のこと、（今後起ろうとするこの世の終末とそれに続く新しい世界の到来）について告げます。ヨハネは、彼が語らなければならない真理の言葉を幻あるいは夢のなかで示めされた。ところが、幻や夢は、昔も今も、はかない存在と考えられており、したがつて幻や夢を借りて語る言葉にはあまり説得力がなかったのではないのでしょうか。そのため、ヨハネは自分の語る言葉がきわめて重要であることをわざわざ強調しています。（二十二章十八・十九）。註解書の著者ローゼは、黙示録の正しい理解は、ただ嚴格で学問的に根拠ある解釈によつてのみ可能であると言います。ローゼによつて、黙示録が、この世の終末から来たるべき栄光の新しい世界の完成までを記した一つの壮大なドキュメンタリー・ドラマになっているように思われてなりま

せん。ヨハネの生きた時代で、世の終末とはローマ帝国の滅亡のことでした。ヨハネは、帝国の皇帝が生ける神として崇拜されていた時代に、帝国滅亡の予言をしています。証人は殉教者をギリシャ語では意味するそうです。確かに、ヨハネの発言は殉教に等しいことでした。ヨハネは、黙示の形式を借りなければ真理を語る事ができなかったのでしょうか。世の末を思わざる今日、ヨハネの言葉はわたし達に慰めとイエスの再臨の希望を与えてくれます。

わたしは、今後二、三ヶ月おきに出版されるNTDを心から待ちたいと思います。

## 「水無」誌七十号を迎えて

石原 秀 志

一九五五年の早春、ささやかながり版ずりで出発した我々の信仰の歩みの記録が、途中幾度かの困難に遭遇しながら、二十年目に漸く七十号に達する事ができたことを心より喜ぶたい。

たとえ三号雑誌で終ったとしても、それだけの使命を果たした限りにおいて感謝すべきであるが、とにかく三十号前後までは、編集者の特別な御労苦と投稿者諸兄弟の熱心とが、比較的順調な発展を可能ならしめたのであり、その後も種々の困難な状況の中で、時に切れ切れとなり、また不定期であることを余儀なくされ

ながらも、遂に七十号にまで辿りつく事ができたことに、発足当時の私共の初心を想起しつつ、深い感謝を覚えるのである。

このことは、今もこの水戸の地にあつて日曜毎の聖書集会に参加を許されている私共には勿論のこと、かつて集会を共にし、今夫々の働きと生活の地にあつて福音の戦いに連つておられる兄弟たちにとつても変えることはないであろう。更にいえば、「水無」誌の発足を心から祝福し、励まして下さった諸先生のうち、塚本先生、黒崎先生、矢内原先生、金沢先生を始めとする方々が今や天に召され、主にあつて我ら小さき群のつまぎ勝ちな歩みを見守り導き、励ましを与えて下さっていることを思うとき、如何に見ばえなく愚かしく見える歩みであり、記録であろうとも、今に至るまで、上よりの聖手によつてこの小さき群の守られ、支えられてきたことに新たな感謝は溢れる。

健康上の理由の故に昨夏は遂に参加を諦めねばならなかったが、過去十年に及ぶ夏毎の県北横川の地でもたれた聖書研究と祈りを共にする集い、二十年近くに亘つて続けられてきた水戸幼稚園を会場とする日曜集会と、そしてこの「水無」誌七十号に至る歩みとは、夫々に独自のものをもちながら、なお互に深く連り合ひ、参加する者一人一人を夫々の場で励ますと共に、同一の主、同一の御霊、同一の愛に結ばれた者としての自覚を確認する場であり機会であつたと言わねばならない。それらの中で、私共の信仰の記録としての「水無」誌は、それ独自の使命をもち、役割を

果し得たのだということを、あらためて思うのである。僅かな部数、僅かな読者にしか過ぎない眇たる小冊子ではあるが、かつてY兄が明確に指摘されたように、（地方無教会運動）の展開の重要な形態として、今に至るまで、一号又一号と号を重ねてきたのであり、激動する時代の流れの中にありながら、なお流れに流されることのない福音の真理に、一人一人が確く立つことの願いと、先白と、戦いと、祈りとを、夫々の小さな文章は私共に語りかけてくれたのではなかったか？

さればわが愛する「水無」誌よ、今世界と祖国、人類と我らをめぐる自然とのおかれてあるあらゆる危機的状況の中にあつて、福音に確く立つて、更に一号又一号と雄々しく前進を続けんことを、

重ねて、今もなお編集の重き労苦を続けて下さる半田兄に心より感謝申上げる。

（七十四・二・十二）

## 『後記』

○十二月二十三日、水戸幼稚園において、クリスマス集会を開いた。東京から岩島公先生、字野兄、佐川姉など参加され、土浦か

ら小田御夫妻が応援に駆けつけて下さるなど、充実した集まりとなった。

岩島先生と田中獅熊兄の講演、岩島先生のお話しは別掲のとおり、二回に分けて掲載させて頂くこととした。先生は、塚本、矢内原、金沢先生に学び、高校における国語教育と福音の伝道に生涯を捧げられ、東京都下八王子市においてキリストの十字架による絶対非戦平和の旗を高くかかげて戦っておられます。

その御家庭は、成人されたお子様方がすべて参加される文字通りのクリスチャンホームであり、発行される「永遠の日本」誌は、独立自由、平和の香気に包まれ、理論的でなく、すべて福音の実証に満たされています。講読希望者は左記へ申込んで下さい。

八王子台町一の四

永遠の日本社

定価六五円（共）切手可

年四回 二六〇円

水戸無教会キリスト教集会のお知らせ

A 水戸市緑町三の九の二六水戸幼稚園内

B 水戸市南町二丁目商店会館（ダイエー裏）

B会場は第四日曜十一時より、A会場は第四日曜十一時より。自由参加。聖書讃美歌持参、会場費五十円、第一へブル書大森、第二エレミヤ野本、第三ペテロ、第四は交互。

○本誌も二十年を迎え、七十号となった。遅々とした歩みながら上よりの加護ありて。梅ひらく。お元気を祈ります。

（半田）

水戸無教会 第七十号  
昭和四十九年三月発行

水戸市緑町三一九一二六  
水戸幼稚園内

発行人  
編集人

松本文助  
半田梅雄

（実費五十円 二十円）